



TITLE:

# 中國上代の都市國家とその墓地：商 邑は何處にあったか

AUTHOR(S):

宮崎, 市定

---

CITATION:

宮崎, 市定. 中國上代の都市國家とその墓地：商邑は何處にあったか. 東  
洋史研究 1970, 28(4): 265-282

ISSUE DATE:

1970-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/152810>

RIGHT:

# 東洋史研究

第二十八卷 第四號 昭和四十五年三月發行

## 中國上代の都市國家とその墓地

——商邑は何處にあったか——

宮 崎 市 定

### 一 小屯は殷虛でない

周の武王に滅された殷の都、商邑は堂々たる都市國家であつた。詩經の商頌、殷武は殷に都を遷した盤庚の甥、高宗武丁をたたえた詩であるが、その中に

商邑翼翼 四方之極——

商の都城は何と壯麗なるかな、

四方の模範たるにふさわしく

とあつて、その偉容が偲ばれるのであるが、さてこの商邑は何處にあつたのであろうか。もつとも今時、こんな質問を出すと言下に、この頃盛んに考古學的發掘の行われた殷虛にそれは定まっているではないか、と反つて不審がられるかも知れない。ところが私は實は、現今普通に殷虛と言われている中國河南省の安陽縣下の小屯附近が、果して本當に殷虛である

かどうか疑問を抱いているのである。そもそも殷虚なる地名が現今のように廣く常識化したのは決してそんなに古いことではない。前世紀の終り頃までは河南省のどこにも殷虚などという地名は知られていなかった。土地の人も知らなかったし、地圖にも書かれていなかった。二千年ほどの長い間、全く忘却されていた地名が古典の中から探し出され、現今の安陽縣下の小屯附近に比定されるようになったのは、清朝末期、そこから卜辭を刻した甲骨片が出土することが知られて以後のことである。

古代の占卜に用いられた龜甲獸骨片は最初は熱病に効能があるという迷信的な意味で、民間藥として賣りひろめられたが、これを考古學的な遺物として正しく評價し、自らその蒐集品を圖録とし、「鐵雲藏龜」の一書を世に問うたのは、文學者としても有名な劉鶚である（一九〇三年）。彼はこの甲骨文が殷代の文字であることを想定したが、その出土地については正確な認識をもたず、人傳ての誤聞そのまま、河南省湯陰縣だと信じていた。同じ誤りは日本における最初の甲骨文研究家、林泰輔博士によっても踏襲されている。

甲骨の出土地を正しく安陽縣下の小屯附近と突きとめたのは、ついで研究に着手した碩學羅振玉（一八六六—一九四〇年）であり、文字の讀解を更に進めて、殷代の帝王の名がその中に見えることを主張し、いよいよ甲骨が殷代遺物に相違ないと斷定した。彼はその弟子たちを河南省に派遣し、小屯附近において實際に卜辭を刻した甲骨片が地表に散在し、更に文字のないものが各地に堆積しているのを見届けさせた。この小屯附近に殷虚なる地名を與えたのは、實に羅振玉に外ならなかった。このことは正に彼のよき協力者、王國維が述べている通りである。

（甲骨）文字を審釋するは、自ら羅氏を以て第一と爲す。其の小屯の故殷の虚たるを考定し、及び殷帝王の名號を審釋せしは、みな羅氏より之を發したり。（靜庵文集續編、最近二三十年中中國新發見之學問）

このことは言いかえれば、殷虚なる地名は當時において、學界はもちろん、民間にも全く知られていなかったことを物語るものである。ところで私個人の今の氣持から言えば、羅振玉が甲骨文字の讀解に多大の業績をあげたのは、その功績を

認めるに客かでないが、甲骨の出土地に殷虚なる地名を比定したのは、あまりに物を多く識りすぎた大學者の勇み足として惜しまれるのである。小屯は單に殷代甲骨の出土地、或いはせいぜい殷代の遺蹟というだけに止めておいて貰いたかつたと思う。

羅振玉が小屯を漢代まで傳わつた古い地名の殷虚に比定した根據は、史記、項羽本紀に彼が秦の將軍、章邯を鉅鹿に破つた後、これと和睦したことを記した次の文

羽すなわち與に、洹水の南、殷虚の上に期<sup>ほとち</sup>う。

に依つたものである。ところで羅振玉は

洹水南殷虚上

の句を、洹水の南に密接する殷虚のほとり、と解して小屯がその條件にあうと考えたらしいが、もしそうであるとすれば、これは誤解という外ない。というのは史記の中に殷虚の位置を記した箇處が外にあり、恐らく司馬遷は兩者を読み合せて、始めてその場所が正確に把握できるような表現を故意に用いたと思われるのである。蓋し中國古典に屢々見られる常套手段というべきである。それは史記、衛康叔世家に

周公旦は成王の命を以て師を興して殷を伐ち、武庚祿父と管叔を殺し、蔡叔を放ち、武庚の殷の餘民を以て康叔を封じて衛君となし、河・淇の間、故商の墟に居らしむ。

とあり、ここにいる故商の墟は即ち殷虚に外ならない。そしてそれが淇水と黄河の間にあることを言っているから、前の項羽本紀の洹水の南という文と併せて、始めて殷虚は洹水と淇水と黄河とによって圍まれた中にあることが判るのである。更に詳しくいえば

洹水の南、淇水の北、黄河の西

ということになる。果して然りとすれば、殷虚は小屯のように、あまりに洹水の南岸に密接しすぎているのは適當でな

い。これでは洪水と黄河との間とは言えない。殷虚はもっと東南に下って、黄河に近い平坦部の中央に出てこなければならぬのである。

## 二 殷・衛都市國家は何處にあったか

そもそも殷虚とは如何なる意味であらうか。これも自明の理のように見えて、實はそこに大きな誤解が初めから存在したように思われてならない。先ず殷虚という時の虚は、或いは土扁を加えて墟につくり、後世では寧ろこの方が多く用いられるようになったが、音も訓も兩者同一である。虚・墟には色々な意味があるが、この場合に最も適當した訓は亡國之墟という時のそれであらう。もっとくどく言えば、亡びた國の都城の廢趾の意味である。劉向の新序卷四、雜事第四の中に

昔は齊の桓公、出て野に遊び、亡國の故城、郭氏之墟を見る。野人に問うて曰く、是は何の墟たるか。野人曰く、是は郭氏の墟たり。桓公曰く、郭氏なる者は、曷んぞ墟と爲りしや、云云。

の如き用法がある。されば殷虚という場合、それは單に殷の故蹟というだけに止まらず、殷王朝の最後の都城、すなわち周の武王に滅ぼされたる朝歌の邑の廢墟という意味にとらねばならぬのである。これは虚という文字の解釋の上から必然的に生じた意味であるが、殷虚の場合には更にその上に、歴史事實の上から必然的に生じた第二の意味が加わっていることを忘れてはならない。それは殷虚はそのまま周代の衛國の都城に利用された事實である。

史の傳える所によると、周の武王は紂王を滅した後、直ちに殷王朝の命脈を絶ったのでなく、紂の子、武庚祿父を立てて殷の民を支配せしめ、これに弟の管叔と蔡叔を配して政治を監督せしめた。いわゆる三監である。然るに武王死して成王が嗣ぎ、叔父の周公が攝政となると、これに反感を抱いた管叔と蔡叔とは、祿父と共に周に叛して兵を擧げた。そこで周公は三監を征してこれを平げ、管叔と祿父を殺し、蔡叔を放逐した。さてその跡始末であるが、殘餘の殷民を支配する

ために、少弟の康叔を衛君に封じ、殷虛をそのまま都とさせた。このことは諸書に略々一致した記載があり、史記衛康叔世家の文は既に上に引用したが、外に左傳、定公四年の條に

康叔に分つに、大路少帛、綯伐旃旌、大呂、殷民七族（中略）を以てし、命ずるに康誥を以てして、殷虛に封ず。

とあり、もしこの「殷虛に封ず」という句を單に、「殷の領土をそのまま與えた」と解するならばそれは歴史的な解釋ではない。當時の社會は、我々の研究が明かにしたように都市國家の時代であり、殷も周も、また衛もその本質においては一箇の都市國家に外ならなかった。故に「殷虛に封ず」というのは、都市國家殷の滅びた跡へ、新しい衛なる都市國家を建設せしめたという、甚だ限定された意味なのである。そこで殷虛は今や新興の衛の都として生れかわり、以後史上において衛と稱せられることになった。然るにそれが再び殷虛と稱せられるように逆戻りするのであるが、その理由を知るためには、其後の衛の歴史を辿らなければならない。

衛は初代康叔の後、第十七代懿公の時に北方の異民族、狄（翟）の侵入を蒙った。傳説によれば懿公は奇妙な癖があつて鶴を好み、鶴を大夫の位に任じて高祿を與え、出入に軒車に乗せて厚遇する一方、國人の困窮を顧みなかった。そこで狄人の侵入を受けたさい、國人に武器を分配して防禦に當らせようとしたが、國人は口々に「鶴を使え」といつて君主の命に應じなかった。この隙に乗じて狄人は衛に入つて懿公を殺したが、恐らく都城はこの時に大なる破壊を蒙つたものと思われる。衛人は東に走り、殺された懿公の伯父昭伯の子、戴公を立てて曹に止まつたが、戴公は一年ならずして死んだ。戴公の弟、文公は當時東方に勃興しつつあつた齊の桓公の許に走つて救を求めた。齊の桓公は諸侯と共に狄人を伐つて衛を助け、文公を楚丘に都せしめて遺民を收容させた。文公はよくその位を守り、中興の業を成したが、その子成公の時、更に都を濮陽に移した。この頃南方に楚國が盛んとなつて北方の晉と覇を争い、衛はこの國際紛争に捲きこまれて災禍を蒙ること屢々であつたが、その地が交通の要衝に當るために經濟的な繁榮を保った。春秋末の孔子が幾度か寄寓した衛はこの濮陽の衛である。

さて狄人の侵入によって破壊された衛の最初の都は其後どうなったであろうか。不幸にして我々はその消息を知るを得ないのであるが、恐らく長期に亘って廢趾として放置されたものではあるまいか。齊の桓公の力を以てするも狄人を完全に驅逐して衛都を奪還し、衛人を故郷に復歸せしめることができなかった。晉が齊に代つて霸を唱えるに及び、この地は晉の勢力範圍に歸した。漢書地理志、河内の條にこのことを述べて

河内・殷虛は更めて晉に屬す。康叔の風既に歇んで、紂の化猶お存す。

といっている。遷都後の衛が晉・楚の爭覇戰に際して、楚に與して晉と爭う態度をとつた理由は、晉が狄人退去の後も、衛の故地を押えて返さなかつたことに起因すると思われる。

右に引用した漢書の文に、殷虛なる言葉が使われていることは注意されてよい。もちろんこれは漢書の地の文であり、遙かに後世のものであるが、狄人が衛都を占領破壊し、衛が最初に曹、次に楚丘、更に濮陽へと轉々と都を移すに及んで、從來衛とよばれていた地點が再び殷虛とよばれるようになり、それが漢代に及んだのである。何故かといえは、一たび廢滅した衛都は實は他に適當な呼び方がなかつたのである。衛虛と言おうとすると、衛はまだ滅びていないから、亡國扱いにするわけに行かない。衛の故都と言おうにも、衛はあまりに度々都を移しているので、數箇の故都ができており、その何れかを判別するに困難である。そこで衛國が封ぜられた以前の名、殷虛という名に返るのが最も適當である。それは恰も曹、楚丘、濮陽が、次々に衛の都となった時には、何れもその間だけ衛とよばれていたのであるが、都が他に移れば夫々再び元の名に返つて、曹、楚丘などと呼ばれるようになったのと同然である。ただ今の場合には、殷だけでもよいのであるが、殷はむしろ王朝名として通っているので、間違いないよう虚字をつけ加えて殷虛としたのである。故に殷虛なる名稱は決して文學的に粉飾した結果でなく、また後世普ねく行われるようになった雅名でもなく、實に歴史的必然によつて自然に生じた名稱に外ならない。

そこで繰返して言えば、殷虛なる地名は單に殷の故都たるに止まらず、不可避的に衛の最初の都であつたという意味を



小屯及び殷墟附近概念圖

兼ね有し、歴史上には兩者を分離して考えることは出来ないものである。そしてこの都市國家は少くも三回の破壊を経験した筈である。傳説によれば殷王の盤庚がこの都に遷つてきてから二百九十年<sup>⑧</sup>の後に紂王の時、周の武王の侵入による最初の破壊が行われ（前一二二二年）、ついで周公による祿父討伐の際の破壊があり（一二一三年）、最後に狄人による衛懿公に對する攻撃があった（前六六〇年）。そこで若し何人かが殷墟において考古學的發掘を行ったとしたならば、そこには少くも三層の文化遺蹟が重なっているのを發見する筈である。恐らくそれは西方におけるトロイの遺蹟を彷彿させるものがある。先ず上部には衛時代凡そ四百五十年の遺趾があり、その下に祿父時代の約二十年間の遺蹟、更にその下に殷代二百九十年の遺蹟がある。祿父の時代は極めて短からこれを無視することが出来るかも知れないが、衛時代の遺物層は斷じて無視することは許されない。衛代の遺物を避けて、その下から殷代の遺物だけを取り出すことは不可能である。逆に言えば最初から殷代の遺物だけが出土するような遺蹟は決して殷墟ではない、と斷言できるのである。

安陽縣下の小屯においては、國民政府時代になって度々考古學的な發掘調査が行われたが、遂に城郭の存在を認めることができなかった。そして出土遺物が、若し發掘調査に従事した學者たちの斷定するように殷代又はそれ以前の遺物遺蹟ばかりであったなら、これは反つて此地が殷墟ではなかったことを證明するものに外ならない。

然らば殷墟はいつたい何處に存在したであろうか。それは史記の言う所に従つて

洹水の南、淇水の北、黄河の西

の示す範圍内で探すより外はない。但し當時の黄河は今の開封のあたりから急角度に北へ曲り、太行山脈と殆んど平行に北行し、河北



平野の北部に至って東に折れて海に注いでいた。この黄河の大きな灣曲に包まれた地方が即ち河内であって、その中心に殷・衛が存在した。恐らくこの都市國家は黄河に近く位置し、肥沃な平坦部を周圍に控えて、その城内の人口を養わねばならなかったであろう。

黄河が流れていたということは、その土地が附近に比べて最も低かった事實を示す證據である。そして後世、黄河の流れが他に移ったのは、この地方が泥沙や黄土の堆積によって地表が高まったことを物語る。この土沙の堆積の厚みは甚だ大陸的であって、我々の想像を絶するものがある。恐らく殷・衛都市國家は今日では完全に地下深く埋没し、地表には何等の痕跡を留めぬまでに姿を匿してしまつたのであらう。項羽の時代まで、確かに殷虚と指示しうる地點が存在したことは、先に引用した史記の記載によつて知られるが、この殷虚に関する知識を混亂させたのは、漢代における朝歌縣の成立である。周知の如く殷の都はまた朝歌とよばれた。故に殷虚はもとの朝歌であつたわけである。然るにそれとは別に新しい朝歌が出現したのであるが、その起源は項羽の霸王時代にあつたと思われる。彼は秦を滅して全國に對して覇權を握ると、對秦戰爭上の業績について大いに論功行賞を行い、その好む所の將軍を拔擢して諸侯に封じたが、その中にもと趙に屬した部將、司馬卬があつた。史記、項羽本紀に

趙の將司馬卬は河内を定め、數々功あり。故に卬を立てて殷王となし、河内に王たらしめ、朝歌に都せしむ。

とあり、河内を領して殷王と號し、都を朝歌と稱した。この朝歌は、すぐその上文に殷虚なる地名が出てゐるのに一言もこれとの關係に言及されていないから、殷虚とは別の地點であつたに違ひなく、むしろ其後の漢代の朝歌縣に接續するものである。何となればこの後、漢楚の争いに際して、殷王司馬卬は殆んど無抵抗に漢に降り、<sup>④</sup>恐らくその都の朝歌も大なる被害を受けず、漢の天下一統の後、それがそのまま朝歌縣として河内郡に屬せしめられたと考えるのが最も自然だからである。

漢代の朝歌縣が、當時殷虚として知られた地點と全く異つていたことは他にも證據がある。北魏の酈道元の水經注に洹

水と淇水の二流を述べ

淇水は元甫城より東南し、朝歌縣の北を逕たり。

洹水は山を出で、東して殷虛の北を逕たり。

とあって、殷虛は史記の記載と全く同じく、洹水の南にあるに對し、朝歌縣は更に下つて南方にあり、淇水の南に位置しているのである。

このように殷虛を漢代の朝歌縣と區別する知識は北魏時代まで續いてきたのであるが、朝歌なる名が古い殷都の名であったことから、何とはなしに漢代の朝歌が殷代の朝歌と同一であつたような錯覺を生じ、唐代になると混亂紛糾して收拾すべからざる事態に立至るのである。漢書地理志、河内郡朝歌縣の條下、唐の顏師古注に

〔朝歌縣〕紂の都せし所、周の武王の弟の封ぜられし所にして、名を衛と更む。

と説明するなどは、その最も著しい例である。併しながら殷虛に關する知識がまだ明瞭であつた史記の時代までの史料を整理し、殷虛なる土地の特殊性、その位置、漢代の朝歌縣との關係を明かにして行けば、唐代人の認識の誤りなることは問わずして知るべきである。

### 三 小屯地域墓地の年代

羅振玉が殷虛と比定命名した殷虛は實は殷虛でなく、眞の殷虛は他にあつたとすると、そんならいったい殷代の遺物と思われるものの出土する小屯は何なのであろうか。答は至つて簡單である。考古學は最も實證的な學問であるから、調査の結果に即して、ただ事實のままに理解すればよい。併しもしこれを古文獻に連絡を求めて比定を行うならば、文獻學上の約束に従つて誤りなきを期しなければならぬわけである。羅氏の時代にはまだ中國上代の社會が都市國家の状態であつたというような認識がなく、また十分な調査發掘も行われないうで、ただ甲骨が出土するという事實しか判っていなかつた

ので、單に殷代の遺物が出るから殷虛であると結論したと思われる。殷虛は必ず衛都でなければならぬということまでは考え及ばなかったのである。

國民政府の統一完成後、中央研究院所屬の歴史語言研究所により初めて小屯地域の科學的調査發掘が行われ、事業の進行に従つて夥しい遺物遺蹟が發見されて世界の學界を驚かすに至つた。特に世間の耳目を衝動したのは大規模な墳墓群とその豊富なる副葬品の發見である。ここで我々にとって不思議なのは、發掘調査の當事者がこのような新事實に直面して、從來の殷虛なる比定に對して些かも疑惑を抱こうとせず、反つて一層この地が殷虛であることに間違いないという自信を深めるに至つたらしい心理狀態である。どうやら彼等は思いがけぬ莫大な收穫に狂喜して、文獻的な考證などは最早や不要に歸したと感違ひしたのではあるまいか。もっともその背後には、一世の碩學羅振玉、王國維等に對する無條件の信頼もあつたであらう。宏大な墳墓の一群が發見され、しかも豫期した都城の城郭らしいものが一切見當らなかつたとき、彼等は當然これが殷の國都であり得たか否かにもっと疑惑を抱くべき筈だつたと思う。常識で考えても、都城の中に大なる墳墓群が存在する筈がないではないか。

古墳墓の存在する範圍は最初は洹水の南岸に限るようになつたが、やがて北岸に及び西北岡においても大なる墳墓の發掘が行われた。すると殷虛の範圍は何の疑念もなく洹水北部にまで擴張されたが、考えてみるとこれもおかしい話ではないか。羅振玉が小屯附近を殷虛に比定した最も重なる理由は、それが洹水の南にあるという史記の記載に合致するからであつた。殷虛が洹水の南北に亘つては、この前提が崩れてしまうのである。

殷代の遺物の出土する小屯附近はその故に殷虛である。殷虛であるが故に、そこから出土するものは殷代の遺物である。

明かにこのような循環論法が彼等を呪縛し、これ以外の考えを容れる餘地ならしめたと思われる。其後、發掘に従事した學者たちの手によつて、殷虛調査と銘打つた報告が次々に出版された。併し私の立場から言えば、墳墓群の發見が行わ

れた時、この地は新たな事實に基いて、そのまま墓地と規定さるべきであつた。そして古代の墓地は如何なるものかを改めて検討すべきであつた。

西洋の諺に、いかなる理想的な目的を以てするにせよ、新しい植民地を建設する時には、先ず墓地と牢獄を必要とする、と言われているそうである。中國上代の都市國家はその近郊に丘陵を求めて墓地とした。洛邑の北方には邙山があつて最も有名であるが、その外にも折にふれて史に記載が散見する。

齊の桓公に代つて晉の文公が春秋第二の覇者となつた時、彼は衛の東南方にある曹國を攻めたことがある（前六三二年）。城門まで押しよせた晉軍は、曹人の必死の反撃にあつて敗れ、多數の戦死者を遺棄して後退した。勝ち誇つた曹國は敵軍の屍體を集め、城壁の上に曝しものにした。晉の文公は部下の獻策に従い、曹國の郊外にある墓地に陣を移した。これは曹國の人民に大きな衝撃を與えた。晉軍が墓を掘つて祖先の遺體を辱しめはせぬかと恐れたのである。そこで曹國側は急に態度を改め、晉の戦死者を丁寧に棺に收めて、晉軍の許へ送りかえしてやつた（左傳僖公二十八年の條）。この時は晉軍は威嚇しただけで、曹の墓地を實際に發掘するに至らなかつたが、相似たる場合にそれが慘劇となつて實現したものに、戰國時代における卽墨の例がある。

齊・燕の間の二回目の戦いで、燕軍に敗れた齊は七十餘城を悉く失ひ、ただ莒と卽墨のみが齊のために守つた。卽墨の守將が田單で、城中の士氣を鼓舞するために反間を放ち、ことさらに燕軍の暴虐の行爲を挑發した。史記卷八十二田單列傳に、燕軍が郊外の墓地を荒したことを述べ

燕軍は盡く壘墓を掘り、死人を焼く。卽墨の人、城上より望見し、みな涕泣し、共に出て戦わんことを欲す。とあつて、卽墨の墓地は城上より望見しうる郊外にあつたのである（前二七九年）。

小屯地方は殷虛そのものではないが、殷・衛都市國家、すなわち殷虛の近くにあつたことは疑いない。そうとすれば小屯附近の墓地は殷・衛附屬の墓地であつたであらうことは、十分な理由をもつて推測され得る。ところでこれまで發見さ

れた大墳墓は、中國の考古學者たちによってその悉くが殷の王墓に比定されているのであるが、それは抑もどれほどの根據を有するものであろうか。前述の如く、單に殷虛であるから殷の遺蹟に違いないという循環理論にすぎぬのではあるまいか。というのは、既に都市國家そのものが殷から衛に繼承している以上、その附屬の墓地も亦、殷から衛へ繼續したに違いないのである。少くも衛の人民中に含まれたものゝ殷民の七族は、主權者が變つたからと言ってその墓地を變えたとは思われない。もともと殷民の方が文化的には先進であつたから、新しい衛は萬般について前代殷の規模をそのまま踏襲したと見るのが至當である。

衛の時代、その近郊に君主の墓地があつたことを示す明瞭な記載が歴史に残っているのは甚だ興味深い。史記衛康叔世家に第十代の君主、共伯の非業な最期を述べた條がある。

衛の第九代の君主釐侯が死んで、その長子共伯餘が代つて第十代の君となつた。共伯の弟に和なる者があつて父に寵愛され、特に多くの賜與を給せられた。和はこの財を以て死士を養ひ、ひそかに時機を覘っていたが、（恐らく釐侯を埋葬する際に）共伯を墓上に襲撃した。共伯は釐侯の墓の羨（連絡道）に入つて自殺したので、これを釐侯の傍に葬つた。和が自立して衛君となつたが、これが第十一代の武公であり（前八十二年）、武公の四十二年に周の幽王が滅び、翌年平王が東遷するに際して武公は周を助けて功があつた。

この話は衛君釐侯の墓の羨に言及している點が特に面白い。小屯附近で發見された大墓には何れも東西南北の四道、若しくは南北二道の羨が設けられている。或いはこれらの墓の一つが實際に釐侯の墓であつたことも、決してありえない空想ではない。

商代の君主の地位の繼承は果して常に平穩に行われたか否か、史に殆んど記載がない。併し衛國においては釐侯以後の歴史は殆んど革命の連續である。第十一代の武公の五十五年に亘る長い治世と、これに續く莊公の二十三年の世を終える、次の桓公は弟の州吁に殺され、州吁は國人に殺され、代つて弟の宣公が立てられた。宣公は不徳で一女子のことから

太子伋とその弟の壽を殺したので、人望を失い、宣公の死後代つて立った子の惠公は國人に迫われ、その子の懿公は前述の如く、鶴を愛して國人に叛かれ狄人のために殺された。

小屯附近のいわゆる大墓において夥しい殉死者の遺體が見出されたのは甚だ衝撃的な事實で、これを古代野蠻の風習と言つてしまへばそれまでであるが、何か異常な感を免れない。もしもそのあるものを、衛墓と見て、これを衛における歴代革命の事件と結合して考えるならば何等かの説明が可能になるのではあるまいか。特に小屯の對岸における大墓の發掘の際に認められた注目すべき事實は、數箇の墓において羨の入口が重なりあつてゐることである。言いかえれば後の埋葬によつて、その前の埋葬の際の羨が破壊されたのである。これは後の埋葬者が、前の墓の主に對して敬意を拂わなかつたことを意味する。若しも前に埋葬の行われた墓の主が、自己の先祖であることを知り、敬意を抱いてゐたならば、新しい羨によつて古い羨を壊すような仕業は努めて避けようとしたに相違なく、又それはさして難事ではなかつた筈である。

小屯附近がもし殷・衛都市國家附屬の墓地であるとするならば、その墳墓が殷・衛二代に亘ることがありうると共に、その附近から出土する銅器などの遺物も亦、殷と衛とを含むものと見なければならぬ。事實、殷から衛への移り變りには、もちろん斷絶の面もあるが、同時に連續の面も相當強く残つてゐたと見なければならぬ。君主が殷から周の一族の衛に變つたのは斷絶であるが、その下に仕えた殷民七族は連續の面を代表する。恐らく衛の文化は先進の殷の影響を蒙るのと多く、従つて銅器等の形象も今日から殷と衛とを判別することは、學者にとつて恐らく容易であるまい。

同じことは甲骨片についても言えぬだろうか。學者は甲骨とさえ聞けば、直ちにそれを殷に結びつけたがるのであるが、占卜の方法においても、殷から衛に變つた其時から遽かに卜辭が姿を消すようなことがありうるであらうか。左傳、僖公十九年（前六四一年）の條に

衛はこの年大旱であつたので、文公は山川に祭りにすることについて卜を行つたところ不吉と出た。

という記事がある。この時は衛が既に新都の楚丘に移つた後のことであるが、この地は舊都たる殷虛からそれほど遠くは

離れていない。従つて新都と舊墓地との關係が急に絶たれたとも斷言できない。もし文公の時に用いられた甲骨が他のものと一緒に舊墓地に運ばれて、穴を掘つて埋められ、それが饒倖にも二十世紀の考古學者によつて發掘されたとしたならば、學者たちは果してそれを殷代の甲骨とはつきり見分けをつけることができるであらうか。

更に史記卷百二十八、龜策列傳によると、漢代の司馬遷の頃まで龜甲による占卜が普通に行われていて、別に珍らしい現象ではなかったことが記されている。曰く

高祖の時に至り、秦の太卜の官は天下始めて定まりしのみにて兵革未だ息まず、孝恵に及びても享國の日少く、呂后は女主にして、孝文孝景は因襲するのみなるにより、掌故は未だ講試するに遑あらざりき。父子疇官の世々其の精微を相傳うありと雖も、深妙は遺失する所多し。今上の卽位に至り、博く藝能の路を開き、悉く百端の學を延く。一伎に通ずるの士は威な自ら効すを得しむ。絕倫超奇なる者を右となし、阿私する所なからしむ。數年の間、太卜大いに集會す。上の匈奴を撃ち、西のかた大宛を攘い、南のかた百越を收めんと欲するや、卜筮は表象を預見し、先ず其の利を圖るに至る。猛將の鋒を推し節を執り、彼に勝を獲るに及んで、著龜・時日も亦た力あり。此に於いて上尤も意を加え、賞賜或いは數千萬なるに至る。丘子明の屬、富溢貴寵、朝廷を傾く（中略）。余江南に至り、其の行事を觀る。其の長老に問うに云うならく、龜は千歳にして乃ち蓮葉の上に遊ぶ云云と。

なおこの下に褚先生の補記が續くのであつて、龜甲による占卜は決して殷代の専有ではなかつたのである。

#### 四 今後の課題

いわゆる殷周革命は中國の歴史の一つの出發點として重要な意義をもっている。それにも拘わらず、私は長い間その際の具體的なイメージを得ることが出来ぬのに苦しみながら、そこに何かもやもやしたものが纏っているのを拂拭することができなかつた。このもやもやは中國上代を都市國家時代と規定することによつて次第に薄くなり、それと共に古代の社

會狀態も漸やく明瞭に把握できそうになってきた。ところが今度は殷虛の問題が前面に立ちふさがって、私の古代史理解を妨げるのであった。そこで凡ての問題を白紙に戻し、原點に立返ってから、私の理解する所を主として歴史を再構成して行くと、どうしても今迄一般に行われてきた殷虛に關する通説は成り立たなくなったのである。そんならどうしてこのような通説が成立するに至ったか。

從來の上代史の編年體系は王朝の存在を過大に評價しすぎたと思う。先ず、夏に始まり、夏の次は殷、殷の次は西周であり、西周の次は東周であり、東周に至って初めて列國の存在を意識に上せ、春秋から戰國となり、戰國が統一されて秦となり漢となる。それはそれに違いないが、具體的な文化の發展を辿ろうとする時、この年表の體系は甚だ不親切ではなからうか。殷から西周へは具體的に言えば河南省の安陽附近から一舉に陝西省の長安附近へ飛ぶのであるが、この間の空間的な距離を無視して、殷の滅亡の直後をすぐ西周で受けて果して適當であらうか。現時中國考古學の成果によれば、殷代の豊富な遺蹟、遺物の後を受けて、暫く周代の空白な時代が続くと言われるのは、おかしい話であるが、これはこのような年表に依據した當然の結果といえる。

私は都市國家時代の社會においては、後世のような統一國家の時代とは異った觀點に立ち、異った研究方法を用いねばならぬと考える。それは何よりも事實の連續に重きをおき、多數の都市國家の中から、最も適當なものを選んで一貫した年表を作成し、これを座標として遺蹟・遺物の編年體系を考案すべきだという提案である。私がいま考えている年表は

#### 殷—衛—戰國魏—秦—漢

を主軸とする。殷衛の二時代は私の考えでは小屯がその大部分を蔽うに足ると信ずる。問題は衛の末期濮陽時代と戰國魏とである。現在の中國はまだ純粹な學術的目的のために大がかりな考古學的調査を行う餘裕はないであろうが、我々としても別に急ぐ必要はないではないか。將來濮陽と大梁すなわち開封の地下調査が行われたならば、衛の文化がいかに魏に影響を及ぼしたかの経緯が知られ、更に魏の文化が秦に、ひいては漢に感化を與えた次第を知る手掛りを掴むことができ



るであらう。

私は常に中國古代史研究の成功か否かは、それがうまく漢代まで接續するかどうかに懸っていると考へている。もし遺物の編年體系の上で上述の文化繼承圖が實證されたならば、それに洩れた西周、東周、更には鄭、魯、齊などの地位は、そこから演繹して説明することができるであらう。

現代中國の考古學者たちの調査や研究において成し遂げた業績は、それなりに高く評價されなければならない。併し實際に發掘に従事し、現に實物を手にして觀察する有利さがあつたというだけで、歴史上の根本問題に對してまで、一々彼等の意見に従わねばならぬ理由はどこにもない。正直に私の感想を述べるならば、中國史の研究はもし從來のままのやり方が續くならば、現今の中國本土の學者には安心して任せておけないような氣がする。彼等は學問の周圍を取巻いている氣流においては甚だ進歩的であり、時には急進的であるに拘わらず、學問の中味そのもの、すなわち専門家でなければ言えない部分においては反つて保守的であり、時には封建的とも見られるほど事大的である。私がこんなことを此處で言わねばならぬのは、これを我國でこれから研究を始めようとする若い學者たちに對して言わねばならぬ義務のようなものを感じているからである。

中國考古學について全くのアウトサイダーである私がこのような論考を纏めることができたのは、日本の専門家が手際よく一目瞭然に問題を整理しておいてくれたからである。殊に貝塚茂樹編「殷帝國」、樋口隆康著「北京原人から銅器まで」の二著を多く利用させて頂いたことを感謝する。

## 註

- ① 戴公の曹は衛に屬する小邑で、史記曹叔世家の曹とは異なる。

- ② 殷都の繼續年數。朱右曾輯錄「古本竹書紀年」に

盤庚の殷に徙りしより紂の滅ぶるに至るまで七百七十三年、更に都を徙さず

なる文を史記殷本紀正義より引用するが、王國維の校補（海寧王靜安先生遺書第三十六冊）には

國維案するに、此れ亦た注文、或いは張守節が本書を隱括せるの語なり。

といつて、右は竹書紀年の本文でない主張する。何れにせよ、七百七十三年というのは明かに長きに過ぎる。いま普通の説に従つて二百九十年としたが、或いはこれでも長過ぎるかも知れない。更に下に續く衛の都であつた時代の四百五十年も同様に長過ぎる感を免れないが、今はこの點に深く立入らないで通説に従つておいた。

### ③ 殷の三監について。前漢書地理志に

河内はもと殷の舊都なり。周既に殷を滅し其の畿内を分ちて三國と爲す。詩風の邶・庸・衛國これなり。(師古曰く、紂城よりして北は之を邶と謂い、南は之を庸と謂い、東は之を衛と謂う)。邶は以て紂の子武庚を封じ、庸は管叔これに尹たり、衛は蔡叔これに尹たり、以て殷民を監す。之を三監と謂う。故に書序に曰く、武王崩じて三監畔く。周公之を誅し、盡く其地を以て弟康叔を封じ、號して孟侯と曰い、以て周室を夾輔せしむ。邶庸の民を雒邑に遷す。

とあり、これによれば康叔は領土としては三監の地全部を得たが、人民は先に蔡叔の領した殷民だけを與えられたのであつて、祿父と管叔の領した殷民は洛邑へ移されたことになる。然るに史記衛康叔世家によれば本文中に引用した如く、康叔は武庚祿父の領していた人民を與えられたことになっていて不一致があるが、今は史記に従う。私はそこから康叔の衛國は祿父の國、祿父の國は紂王の殷と推測したが、この點については別の論も成り立つ。康叔の衛は蔡叔の衛の名を受けたに違いないの

で、その土地も蔡叔の國を襲つたとも受取れるのである。或いはここに引かれた師古註に従えば、紂王の本來の殷都は三監時代に一時放棄され、三監の叛亂平定後に、康叔の衛國によつて復興されたという見解も成立つ。併し何れにしても三監の時代は僅に十年に過ぎなかつたので、この長さを盤庚より紂王に至るまでの殷や、康叔から懿公に至るまでの衛と比較すると、殆んど比較にならない短時日である。

④ 司馬印と司馬遷。史記太史公自序によると司馬印と司馬遷とは同原の一族であるという。従つて司馬遷は司馬印に對して特別の興味を有したらしく、彼が殷虛の位置について明確な知識があつたのは、何等かの便宜を受ける機會があつたのかも知れない。

⑤ トと筮との關係。文公によるトの結果が不吉と出たとあるのは明らかにおかしい。何となれば吉凶は龜トの用語ではなく、筮占の言葉だからである。龜トにおいては、その結果は最も具體的に言い表わされるのが常である。史記齊太公世家に周の文王が獵に出ようとしてトしたところ、

獲る所は龍に非ず螭に非ず、虎に非ず黿に非ず、獲る所は霸王の輔ならんと

いう答を得たとあるのがそれで、これが龜トの本來の形である。これに對して筮占は陰陽の二極を立て、その種々の組合せによる形象から吉凶を判斷する。龜トはいわば汎神論的、筮占は明らかに二元論である。(筮占については拙稿 *Le Développement de l'Idée de Divination en Chine. Mélanges de Sinologie offerts à Monsieur Paul Demiéville*, Paris 1966

参照)

併し龜卜と筮占とは長い時間の経過と共に互いに相混淆した。特に私は甲骨上の卜辭の中に爻を成分とする文字、たとえ爻という字が現われることを指摘したい。言うまでもなく爻は筮の用語である。私は寧ろこの事實から甲骨文字は必ずしもそれほど古くなく、またそれほど原始的なものではあるまいと想像する。抑も書體が古いということは必ずしもそれが古い時代に書かれた證據とはならない。占卜というような古風な職業には古い傳統が保存されるのは當然のことである。いかに古い傳統を有するにせよ、現實にそれが書かれた時代が新しけれ

ば、そこへ他の世界から新しい要素が流入する可能性が多いと認めなければならぬ。もう一つ、私が殷代の甲骨として間違いないものであっても、それは世間で考えられるほど實年代の古いものではないと主張したいのは、私の史觀から来る。私の考えでは記錄に見えるいわゆる西周時代の年代は餘りにも長すぎると思う。殷の滅亡と周室の東遷とは、周民族の東方への移動という一連の事實であって、兩者の中間に何百年もの時間があったのではあるまいと考える。(拙著「中國古代史概論」ハーバード・燕京・同志社東方文化講座第八輯)。